九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Changes in maternal consciousness after childbirth and related paternal and family support

宮中, 文子

https://doi.org/10.15017/458567

出版情報：九州芸術工科大学, 2003, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

第1章　研究目的

第1節　研究目的

「母親への発達」を促す援助を考える上で，これに影響する父親や家族の要因について検討し，第II部，III部では母親意識の高いことには，母親自身の抑鬱がないこと，自己価値観が高いこと，夫婦関係の親密度が高いこと，父親意識が高いことおよび父親の子育てへの関わりが影響していることが考えられた．また，第IV部では，マタニティブルーは「母親への発達」の過程における心理的危機とみなされること，第V部では，祖母の子育て参加は乳児期や早期幼児期においての私的な育児支援として，出産後「母親への発達」を促す支援者として評価できると考えた．

本第VI部では，「母親への発達」が健やかでない状況を早期に把握して支援を行うことにより，乳幼児期における child abuse（我が国では子ども虐待としている）を未然に予防できるのではないかと考えている．子ども虐待の対象となるのは児童虐待防止法においては 18 歳までの児童であるが，3歳までの乳幼児期に発生したものは 19.8 %を占めることや，子ども虐待のうち 61 %が実母が関わるものである（厚生労働省,2002）．そのため，出産後，子どもが乳児期から早期幼児期の過程において生じる子ども虐待を特に予防することが重要と考えられる．

本論文では子ども虐待のうち，特に「乳幼児への虐待」に焦点をあて，出産後に強い育児不安のあった母親について 36 か月までの追跡調査により，「乳幼児への虐待」との関係について検討することとした．

第2章　対象と調査方法

第1節　対象と調査方法

調査対象は育児相談事例とした．それは，出産後1か月の調査に回答し，かつ10か月の追跡調査に同意した 582 人の母親（第II部にて述べた縦断的調査の対象）のうち，産後1か月，10 か月，18 か月，36 か月のいずれかの時点で，質問紙